



# 妖雲



川崎ゆきお

海の彼方に神がいる。山の彼方に神がいる。海に神が いる。山に神がいる。いずれも海や山が見える場所でないと、神を感じないかもしれない。見渡す限り山また山だと海は見えない。山の上に登っても、まだ見えない。こういう状態では海の彼方に神がいる、などの発想はないだろう。ただ、山の人達も海を知っている。山の神に飽きて、見知らぬ海の神を信仰することがあるかもしれない。ただ、そうなると抽象性が高くなる。具体的なものがないだけに。

山がなく、海も湖もなくとも、空はある。日や月や星はある。ここは世界共通かもしれない。  
「星を見ますか」  
「星ですか」  
「そうです」  
「滅多に見ませんねえ」  
「月は」  
「目立つので、たまに見ます。たまに見る程度なので、形が毎回違いますねえ。イメージとしては丸いのですが」

「日は」  
「太陽ですか」  
「そうです」  
「朝日や夕日をたまに見ますねえ。昼間は眩しいので、見ませんが」  
「星の動き、太陽や月の動きには何かがあります」  
「ああ、占いの定番でしょ。それに生年月日を組み合わせると、運命が分かるとか」  
「四柱推命ですね」

「しかし、僕はそれができないのです。誕生日は分かっているのですが時間が分からない」  
「記録にあるでしょ。産科の」  
「家で生まれたのです。産婆さんに取り上げられました」  
「そうなのですか」  
「それで時間なんです、朝方だったと母親は言ってましたが、時間までは分かっているよう  
です。朝と言っても何時かまでは分からないのです」

「まあ、そういう占いとは違い、天気占いがあります。聞きますか」  
「天気ですか」  
「天文方、これは昔からそういう役所があって、星の動きなどを観察していました」  
「そうなんですか」  
「それなら、ありふれています。そうではなく、空を見て占うのです。朝でも良いし、昼でも  
いい。星が見えなくてもいい」

「はい」  
「特に注意するのは妖雲です」  
「妖しい雲ですか」  
「そうです。妙な形をした雲が現れると、これは異変の前触れです。特に妖雲は不吉なものだと言  
われています」

「それは雲占いですか」

「相としては分かりやすいですからね」

「手相人相ではなく、雲相ですね」

「これを空想とも言います」

「そこへ来ますか」

「ただ、これは個人の相ではなく、世の中の相なのです。だから世相」

「ほう」

「天地がひっくり返るような大きな災害や事変が分かるらしいです」

「らしい程度ですか」

「当然誰でも読めるわけではありません。天を見て下界が分かるのです」

「ほう」

「これを世相を読むと言います」

「お話しはよく分かりますが、まあ、空想しているだけなんですよ」

「はい、簡単に言えば」

「はいはい」

「しかし、妖雲が浮かぶ空をじっと見ていれば、天啓を得ることもあります」

「それも空想のうちですね」

「はい、まあ、そうです」

了